

青少年問題の文献の動向

青少年問題に関する文献は、広範囲で多岐にわたっており、その中から青少年問題についての基本的かつ重要な情報資料を選択し、分析することは容易なことではない。平成元年度においては、膨大な情報資料を収集分析した後、約800件の資料について本文献集に収録した。

A 社 会

子どもの生活構造(A5社会構造に所収)に関しては、中央青少年団体連絡協議会『なかまたち』28号特集「子どもの時間の過ごし方」、福武書店教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ』9巻3号特集「誕生日」、9巻9号特集「夕食」、京都大学教育学部教育人間学研究室研究報告集1『子どもたちの生活時間と日常生活』などの文献が発行されており、研究・啓発や調査が充実されつつあることがわかる。これらの文献により、子どもの日常生活や家庭生活の実態、遊ぶための条件や環境、一人ぼっちの状況などが明らかにされつつある。

これに対して、青年の生活構造に関しては、大学の紀要等で一部取り上げられているが、子どもの生活構造の解明の進展と比べると、話題の範囲が限定的である。これは、現代青年の生活がますますわかりずらくなり、その構造を総体的にとらえることが難しくなっていることの表れとみることができるだろう。

青少年問題一般(A6社会問題に所収)に関しては、高齢社会との関連(大阪府『青少年問題研究』第39号)、都市環境との関連(友田泰正『都市環境と青少年』、大阪大学人間科学部)の解明に見られるような、社会の新しい変化に注目して青少年問題をとらえる視点、従来のモラトリアムの変化(前出『なかまたち』26号所収、菊地龍三郎「若者たちにとって『大人になること』への条件とは」)の解明に見られるような、青少年の新たな実態に対応する見解、学生に語らせた旧世代に対する不信心(社会教育協会『国民』1078号)に見られる

ような青少年への新しいアプローチの方法などの発展が見られる。

総務庁青少年対策本部の編集協力のもとに、毎月、発行されている『青少年問題』（青少年問題研究所）も、このような研究の発展を反映して、国際化やメディアの発達の影響などの考察、病院臨床などの周辺の領域や国際比較などによるアプローチなど、その内容がいっそう具体化し、深化しつつある。

また、「アルマナック子ども」（『モノグラフ・小学生ナウ』9巻6号）は、通刊100号を記念して発行されたもので、それまでの重要なデータや傾向などが掲載されている。多数の調査の蓄積に基づく文献として注目に値しよう。

青少年対策(A10)に関しては、東京都教育委員会の「心とからだの健康づくり」シンポジウム（問題行動への対応を中心にすえた健全育成から、すべての子どもたちの積極的な健全育成へと視点を変え、「かかわりあい」「みとめあい」「ささえあい」の三つの視点から推進するもの）、『かながわの青少年』における「ふれあい教育運動」（「科学の知」による教育から「臨床の知」を基本とする教育とし、現代社会の「新しい貧しさ」の克服、「共生関係」の学習などに踏み出そうとするもの）、『大阪府青少年白書』における「PLANET（遊星）計画」（青少年が、社会という宇宙のなかを遊星のように自由に飛び回ることを願ったもの）、『山口県の青少年』における「たくましい防長っ子を育てる運動」（心身ともに健全な青少年を育成しようとするもの）や「みんなの子運動」（地域の人々の輪の中で子どもを育てようとするもの）、『宮崎の青少年』における「新ひむか企画スタッフ交流セミナー」（対象を青年から壮年までに拡大し、地域づくり運動のリーダーを育てるもの）、『鹿児島県の青少年』における「青少年自立自興運動」（ともに学ぶ、たくましい心身を養う、真の友情を培う、すなおな心でけじめのある生活をする、の「4つの基本理念」をもとにして、異年齢集団の中での自主的相互錬成活動、地域ぐるみの青少年育成などを行うもの）や地域の伝統を意識した「朝読み夕読み」「山坂達者」などの施策、横浜市青少年問題協議会の「共生社会に向けての青少年の役割と活動（意見具申）」における「共生」の概念の提起（情勢化・国際化・高齢化の進展による人間や人間関係への影響の中で、青少年の内部の成長・発達を鍵概念として、共によりよく生きていくことのできる社会の実現をめざす

もの)、「高槻市青少年育成計画」における「チャレンジ推進事業」や「街角ユースセンター(仮称)」「(「チャレンジする青少年」が自発的に活動したりエネルギーを発散したりできるように構想したもの)など、それぞれに個性のある施策が進められつつあることを示す文献が多い。

なお、これらの文献から、各地で青少年の意識や実態に関する調査が行われていることがわかる。それらの調査結果はそれぞれの資料に紹介されているので参考になろう。

(担当 西村美東士)